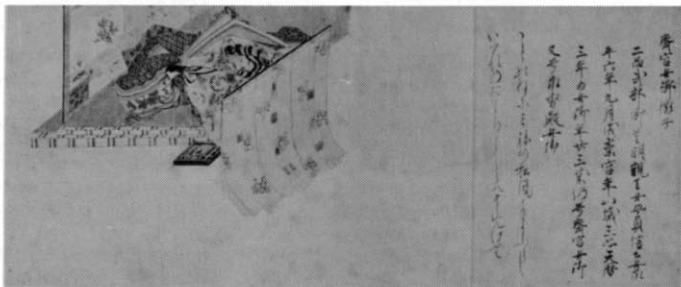


## 齋宮女御 三十六歌仙絵巻から



三十六歌仙絵巻の名品として知られる佐竹本は、各歌仙の絵姿を濃彩で描き、その略伝と代表秀歌一首が書き添えられています。上下二巻にわけて18人ずつ配列し歌合の形式が意図されています。絵を似絵の名手藤原信実、書を後京極良経と伝えられています。

この絵巻は残念ながら大正8年に分割され、現在では各歌人と詞書を1幅とする断簡となっています。分割の際に36人中5人の女流歌人は絵姿が華麗であるところからとくに希望者が多かったので抽選によって頒けられました。5人の女流歌人(齋宮女御・小大君・伊勢・小野小町・中務)のうち齋宮女御をのぞく他の4人は、女官の正装の美しい唐衣裳(からぎぬも)をつけた優雅な姿に描かれて、互いにその才を競うかに見えます。ひとり齋宮女御のみは女御という高貴の身分にふさわしく縹緗縁の畳の上に坐り重桂(かさねうちぎ)の裾は美しい配色をみせて大きくひろがっています(上図)。女御は蔭絵の立派な硯篋を前にして歌を案ずるかのごとく面を伏せ、やまと絵の障子と美しい几帳に囲われています。佐竹本ではただ1人上畳に描かれ、紙幅のゆとりも充分にとって、画家の格別な配慮がうかがわれます。

齋宮女御は名を徽子(きし)といい、延長7年(929)醍醐天皇の第四皇子重明親王の女として生まれ、承平6年(936)、女王8才のとき伊勢神宮の齋宮に選ばれました。齋宮は天皇の御代が替るごとに交替し、その在位のつづく限りは奉仕するのが当時の原則でありました。その人選は未婚の内親王かまたは

女王のなかから占いによって決められます。朱雀天皇の即位に際して新しい齋宮として卜定(ぼくじょう)された徽子女王は、2カ年間野宮(のみや)で精進潔斎(せいじんけつさい)ののちわずか10才で伊勢へ下り、天慶8年(945)20才にて退下、再び京へ帰られました。天曆3年(949)村上天皇に召されて入内、齋宮女御とよばれたのであります。女御は天皇の御寵愛をうけて翌年には規子内親王が生まれましたが、皇子に恵まれなかったためにとくに羽振り(はねぶり)をきかせることもなく、康保4年(967)天皇が崩御されるまで後宮にありました。村上天皇崩御について冷泉天皇が即位されましたが、2カ年で退位され、天延2年(974)円融天皇の即位にあたって齋宮の卜定が行われました。そのとき26才になられた規子女王が選ばれ、奇しくも母子二代にわたって齋宮として奉仕されることになりました。新齋宮の下向にあたって、女御は全く前例にない齋宮のつき添いとして同行されたのであります。新齋宮母子が野宮に在るとき、つれづれの慰めに庚申の夜、歌合が夜を徹して催されました。題は「松の風夜の琴に入る」、女御は「ことのねにみねの松風かよふらし いづれのお(緒)よりしらべそめけむ」と、無量の感慨をこめて詠みあげられました。格調高いこの歌は女御の秀作のなかでも代表作として高く評価され、歌仙として仰がれるその絵姿にも書き添えられています。女御は寛和元年(985)4月、齋宮の退下とともに京に帰り、同年12月、57才で没しました。

季刊 美のたより No.40

昭和52年 9月5日

発行 大和文華館